

あなたにとって芝居とは、
そして、旭川市民劇場とは？
一年を通して、見えてきたこと、感じたことを投稿
いただきました。

2021 私の劇評

『ことばと歌の力』

音楽劇『母さん』

A1 魔術師 大原慎子

開幕と同時に『悲しくてやりきれない』を聴いた途端に涙があふれた。一瞬でサトウハチローの詩の世界に連れて

行かれた。肉親のことでこんなに苦しんでいた人だったのか。『お母さん』の詩集を読んだ時には察することが出来な

かった。もがき苦しむ心情の代わりに、優しいことばで詩を著したということか。ハチ

ロー役の阿部裕さんは、旭川の厳寒の十二月に、舞台上で汗もしたたる熱演だった。母役の土居裕子さんの声は『シャボン玉とんだ宇宙までとんだ』

の時のように澄んでいた。八劇団から一名ずつ出演の俳優・女優の方々は皆、歌声

も良く通り改めて歌はいいなと感じた。仲本詩菜、佐藤礼菜、

小暮智美さんの早変わり何役

もで演じられた芸達者ぶりにも驚き、浅草のレビュー場面はとても愉しかった。でも、サトウハチロー作詞ならば非

これを、という歌が『胸の振り子』である。

その名曲をじっくり聴いたのはそう遠くはない昔。あまりの素敵さに虜こぼになったから。観劇後、雪道の運転に神経

を使いながら帰宅してすぐYouTubeを開いた。服部良一作曲、霧島昇歌の『胸の振り子』を聴く。「柳に燕は

あなたにわたし」。おや、子どもの頃に家族で冬の夜に遊んだ花札の絵にあったなあ。トランプ遊びと並び、普通に

楽しんだカード遊び。そして私の初舞台『舌切り雀』のこ

とまで思い出した。いつもモダンなお洋服、フレアスカートでくるつと回って見せたちよちゃんちよちゃんが日本

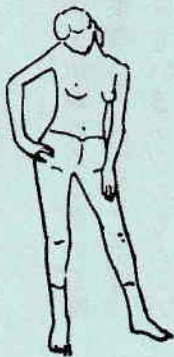
てめくひ 手拭で頬被り、おぼあさん役、茶色い帽子の雀は私、おじい

さんは誰だったつけ……。『すずめがね、おやねでちよんちよんかくれんぼ』。小学

一年の教室での発表会に担任が指導したのは、音楽劇だった！『かわいいかくれんぼ』

もハチロー。『雀のお宿』「さようなら帰りましょう。ごきげんよろしゅう」は、アメリカ19世紀の歌に由来するそう

だが。十二月例会は、忘れていた遠い昔の子供時代を思い出させてくれた。歌はいいなあ。



『11の一年を振り返って』

ひくま大学 椎名裕之

六月にサークルへ加入し四本の演劇を鑑賞。栗原小巻さんとといえば、テレビドラマ『二人の世界』が思いだされ共演者竹脇無我さんとのホームドラマがなつかしい。今も昔と変わらぬほど美しい女優であるが、芝居にかける気迫がとも感じられる作品であった

コロナ禍ではあったが、昨年は更に歌謡コンサート三本、ジャズコンサート六本楽しませてもらった。野口五郎のステージは四名のバックバンドの演奏に感動。大橋純子さんは大病後の久しぶりの歌声を披露してくれたが声量は全く昔のまままで二時間に渡る熱唱のステージであった。七月には今年で十回目となる鷹栖町ジャズフェスティバルが開催。多くの実力派シンガーが集い、

力強い歌声が真夏の夜空に響き渡っていた。その他、旭川ジャズオーケストラ、市内ライブ店での蕎麦と見事にコラボした(?)演奏会も充分楽しませてもらった。

演劇、音楽などこれらの運営に携わる方々の地元の文化を大切に育て上げていこうとする姿に感動。今年度は昨年以上に多く心を動かされる文化的事業の新たな出逢いを今から楽しみにしている。十一月に行われた市内彫刻散歩会も「ブラタモリ」にも劣らぬほど素晴らしい芸術鑑賞会であったことも付記しておきたい。



「観続けることの意味」

六〇代男性

二〇二一年は、市民劇場で今まで四三年間観てきて一番の作品に巡り会えた感じがする。それは、二〇二一年八月例会劇団チヨコレイトケーキ公演の『一九一一年』だ。何が一番かと言うと、開演から終演までの間舞台上に釘付けになり、真正面から向き合えた芝居だったということ。西尾友樹や堀奈津美の圧倒的な演技・存在感、ほかの出演者も皆素晴らしかった。また、脚本・演出も素晴らしかったと思う。

特に、古川健の脚本は良く出来ていると思う。今に通じる国家権力の暴走について、過去の歴史的な事柄を冷静・丁寧に振り返り、作者の思いを込めて描かれていた。講演の時にも話していたが、「私はこう考えるが、ご覧になるあ

なたはどう考えますか」というスタンスが明確に伝わってきた。

芝居を観続けることの意味は、まさにここにあると思う。観続けているからこそ、このような素晴らしい作品に出会えるのだと。

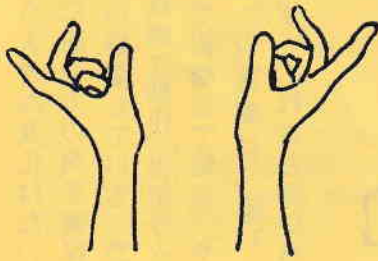
二〇二一年感動のセリフ

七〇代女性

忘れやすくなってきたこの頃ふっと観たお芝居の内容を考えていると、どのお芝居も何か心に残ったセリフがあることに気がつき書いてみました。しゃぼん玉では、自分をしゃぼん玉に例えて「ただ生きていくだけ、どこかに着地しようとするれば割れちゃう、誰かに触れれば壊れて消えてしまう」のただ生きてい

るだけに少しドキツとした。

ドレッサーでは、「自分自身と運命を信じなきゃいかん」「自分の野心を信じ、その野心の奴隷になるんだ、永遠に」「高みにとどまることに比べれば高みに上がる方が易しい、だからどこまでもどこまでも」松井須磨子は、栗原小巻さんの迫力ある声で、与謝野晶子の詩「君死にたもうことなかれ」の朗読で「親は刃をにぎらせ人を殺せと教えしや（教えたのか？）」「いまだにハツとさせられます。人形の家での



セリフ「人形ではない人・人間なの」？

一九一一年は明治時代でなくとも現代にも通じるお芝居のような気がします。劇中自由って何ですかの問いに菅野須賀子が、「人間一人一人が自分の顔を持ち、自分の名前を持ち、何に依存することもなく自分の足で立、自分の頭で考え、自分の口で話す」と言うことです。「私達は皆、自由生きる権利を持って生まれてきたのよ」「陛下が神でなくなったら、次は何が神様になるんですかね」ドキツとしますよね。最後に今の私は「私の顔をしていますか、私の名前を持っていますか、私の足で立っていますか、私の頭で考え私の口で話していますか、私は自由ですか」菅野さんに問いかけているのを聞いて、私に問いかけてきた気がした。脚光を浴びない女から、「人

の心は弱い者、だから人は支え合う」「時には人はミスをする、だけど人は許し合う」お母さんの言葉で「私の人生、あなたの人生、仕方ないもの」ちよつと寂しいセリフですが、お母さんの娘を思う気持ちがよくわかる気がした。

音楽劇「母さん」は、セリフより皆が知っている歌の数々なので省きます

本当にお芝居って素晴らしいですね。

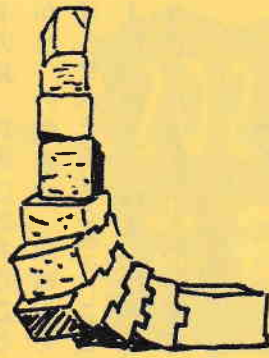


「素晴らしきかな演劇」

源 寺嶋 昌俊

義姉が、昔から市民劇場にかかわっていた。亡妻が例会は然り、上京の折にも劇場に足を運んでいた様だった。妻の替わりに、入会してみた。妻が元気な時に、一度連れていつてもらったことがある。それも前の席だった。六〇代から聴力が衰え、補聴器を使う生活になっていたが、まあ、なんとかなるだろうと、その時は思っていた。そして舞台がはじまった。しばらくして、隣の人、会場の殆どの人が、爆笑に近い笑いに包まれたが、私にはそれが理解できず、取り残された感じであった。台詞がきこえなかった。物語の流れで、概ね理解はしていたが、この先どうなるのだろうと、退会も選択の世界にあったこともある。

今もそう大きな変化はないが、義姉に前の方の列を確保してもらい観劇している。然し役者の真剣な動作、表情等々に感動して観劇して帰る。やはり「生」の演劇は「古い」を目覚ませてくれるものがある。



「忘れられない

二〇二一年例会

F 09 N・Y

貪るように「松井須磨子」に関する本を読んだ。加来英治の演出は？栗原小巻はどう演じるのか？六月例会への期待はほとんど膨らんだ。しかし観ることは出来ず、涙をの

んで諦めた。脚本がない分、あれこれ想像する舞台は豊かで楽しい時間であった。

「劇団チヨコレートケーキ

耳にしたことのない甘い名からは考えられない「大逆事件」そのギャップに興味を湧く。更に八月十三日にNHKで放映された古川健作のドラマを観その作家に魅かれる。権力側が被告人一人の女性に迫りながら、幸徳秋水らの大量死刑の判決を下す。その女性「菅野須賀子」は「野に落ちし種子の行方を問いますな 東風吹く春の日を待ちたまえ」と歌を残し、微笑をたたえ、絞首台に登ったという。自らを欺かない生き方は「松井須磨子」にも共通している。

「自分らしく 自由に生きる」という気概の女性は、私たちにつきつけられている課題でもあることを改めて演劇から学ぶ年であった。

「もっと旭川で

演劇を観続けたい」

感想会が大好き人間

演劇を観続けることでつないできた五〇年。その記念誌を読み終えたとき、「市民劇場・演劇に出会えた喜び」をあらためて実感させられました。演劇とは全く縁のなかつた私に声をかけてくれた情景が鮮やかに蘇ります。私の人生にとつてとても大切な瞬間でした。それから十三年を経た今、人生にとつてなくてはならない存在にまでありました。こうして五〇年の歴史を刻んできてくれたからこそ「一九一一年」という作品にめぐり会えたのです。演劇との出会いも一期一会ではないかと感じます。なぜそこまで惹かれたのか。それはこの作品が描こうとするテーマの普遍性、そしてそれを今観ることがで

きたことの必然とも思える出会いです。(劇団チヨコレートケーキの作家・古川健さんが来旭された際に「権力が国民、民衆に害をなす瞬間を描いている作品ということでは、例えば、初演「二〇一一年」のときより今の方が、よほど今日的ではないかという感覚が僕らの中にあります」と話されました)。このお話にとつても共感できたのです。

権力の本質は一一〇年たつた今も何も変わっていません。今、人権が本当に守られているといえるでしょうか。社会に目を向けると格差と貧困が拡大し、生きる権利すら保障されていない現実が突きつけられています。そして「自己責任論」が跋扈しています。こうしたことを自分に引き寄せて考えると、今何をなすべきかが私に鋭く問われてくるのです。「平和や自由、権利や

民主主義は誰かが守ってくれ
るわけではない。憲法に書か
れているから守られているわ
けでもない」と。労働者・勤
労大衆が権力に守らせるため
の闘いを続けてきたからこそ
かろうじてあるのだと。しかし、
今はせめぎあいの状況です。
傍観者であってはいけないこ
とをあらためて肝に命じまし
た。

劇団チヨコレートケーキは
大逆事件やナチスなど社会的
な事象をモチーフにした作品
を作り続けています。数ある
作品の中で「治天の君」「追憶
のアリラン」が戯曲集として
文庫化されたものを読んで、
あらためて劇団チヨコレート
ケーキの作品をもう一度観た
いと強く思ったのです。そう
した意味で『一九一一年』は
今までにない衝撃を私に与え
た作品でした。

そのためには市民劇場を継

続・発展させなければなりま
せん。作品との出会いはいつ
になるかわかりません。だか
らこそ市民劇場が今置かれて
いる厳しい現状を乗り越え、
存在させ続けなければならな
いのです。

「学び舎」である市民劇場を
なくしたくありません。心に
潤いと豊かさを、何より想像
力を育むことの大切さを教え
てくれる演劇をもっと旭川で
観続けたいのです。市民劇場・
演劇と出逢えた喜びを忘れず、
もう一人の自分との出逢いを
追いつめ続けていきます。

